

情報過多の時代の情報リテラシー

富山県高等学校教育研究会
情報部会長 筒井 慎一

レポート提出という形で到達度や理解度を確かめるという方法は、教育界においては今も昔もたいへん重要な手法であり、今後とも普遍的な位置が与え続けられると思っています。昔は、図書館に行ってそのレポートに関する適切な本を探すことから始め、それらの内容をしっかりと咀嚼した後にはじめて自分の言葉で再構築するというような学び方をしていたと思います。しかし、最近では、そのレポート内容や形式によっては、グーグルで瞬時に検索し適切なウェブサイト等を見つけて、コピー＆ペーストを繰り返し瞬時にレポートが完成されることも少なくないということです。そのようなレポートの最大の欠点は、多くの者が同じような文章や内容となってしまう、はなはだしい場合は文章や並べ方までほとんど同じになってしまうことだと聞いています。

そういうレポートでも作成者がその内容を真に理解しているのであれば、優秀だと評価されても結構だと思いますが、前述のような楽な方法で得たものが、果たして真の理解に到達できるのでしょうか。私はまったく否定的な立場であり、見かけ上の美しい仕上がりに騙されてはいけないと考えています。だからと言って、私はグーグル検索を使ってはいけないと主張するわけでもありません。グーグルで検索することは、レポートに関する全体的俯瞰を行うにはとても重宝ですし、どこにどのようなレベルの資料があるのかを把握するのにたいへん便利です。ただし、自分の扱う間口の広さや望ましい深さを推し量るところで留めるべきであり、その際においてすら出典や引用の明記は当然であると言いたいのです。結局のところ、自分自身の言葉を用いて自分自身の思考を深めることが肝要で、そうすることによってしか新しい事柄に関する理解は深まらないと考えます。このような懸念はプレゼンテーションの際においても同様であることは言うまでもありません。

今、私たちは情報過多の時代にあり、その押し寄せる情報の適切な取捨選択に迫られています。三十年ほど前の図書館利用という手法に比べ、グーグル検索等の方法は質・量ともに豊富な結果が得られますが、今も昔も活字になっているものがすべて正しいとは限らず、必ず間違いも存在しています。事実、曖昧なデータ等を基に独善的な解釈を繰り返しているにも拘わらず、さも普遍的な妥当性があるかのような記述のサイトも少なくありません。正確な情報を適切に利活用させるためにも、我々は「情報リテラシー」すなわち「情報が必要なとき、それを認識し、効果的に発見・評価・利用する能力」の育成を常に念頭に置きたいものだと思います。

現在発表されている新しい指導要領素案によれば、「社会と情報」と「情報の科学」の2科目が設けられるということです。前者は、情報化の進む社会に積極的に参画することができる能力・態度を育てることに、後者は、社会の情報化の進展に主体的に寄与することができる能力・態度を育てることに重点を置くというような説明がなされています。いずれを選択しても、情報教育の3観点である「情報活用の実践力、情報の科学的理解、情報社会に参画する態度」をいっそう重視することには変わりはありません。多様化する高校生の実態を把握しながら、倫理観や規範意識の育成に特に配慮した上で、能力・適正、興味・関心、進路実態に応じて、深く学ぶことが可能となるように、さらなる創意工夫をお願いすると同時に、これまでの深甚なるご努力に心より感謝いたします。